

日本英語教育史研究における英単語集の位置づけ

How are *Tangoshu* (wordbooks) from the Edo Period to the Present Defined through the Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan?

熊谷允岐

Masaki KUMAGAI

キーワード

英単語集、英語教育史、英学史、英語教育学
English wordbooks, history of English language teachings,
history of English language studies, English language education

Abstract: This study attempts to define *tangoshu* (English wordbooks) through the lens of the historical studies of English learning and teaching in Japan. The researcher has explored the history of *tangoshu* from the Edo period to the present, focusing on why they were made and how they changed over time. However, this undertaking proved challenging, as several discussions have been neglected in previous research, including the following two: what the term *tangoshu* means in historical studies of English learning and teaching in Japan and what functions and characteristics *tangoshu* can inherently have. To clarify these neglected subjects, this paper examines the conditions of *tangoshu* through a comparison with the materials that are expected to be confused because of the similarity of appearance and function, e.g., *jisho* (dictionaries), *goilist* (wordlists), and *tangocho* (vocabulary notebooks), to define *tangoshu* in general. In summary, this paper concluded that *tangoshu* have the following three characteristics: (1) they are not designed to look up words, but to memorize them; (2) they provide a meaning that corresponds to the attached headword, and self-study is possible; and (3) they are not created or used by the learners themselves, but are compiled for other learners. These characteristics are common in almost all *tangoshu* compiled from the Edo period to the present. To judge each material as a *tangoshu*, though, it is necessary to examine them from various angles, such as the title of the material, format, purpose of compilation, and historical background, and utilize the above three characteristics of *tangoshu* as important

conditions for facilitating such examinations. This study will also enable other researchers to determine more clearly whether the materials collected for their studies were actually *tangoshu*.

1. はじめに

英単語集（以下、単語集）とは何か。現代のわれわれがこの用語を目にする、あるいは耳にした際に想起されるものは、いわゆる「受験用単語集」である場合が多いのではないだろうか。世代にもよるであろうが、小野圭次郎『新制 英語の単語研究法』、赤尾好夫『英語基本単語熟語集』（通称、「豆単」）、森一郎『試験に出る英単語』（通称、「デル単/シケ単」）、宮川幸久『英単語ターゲット 1900』などは、大正期から現代までにおける英語学習者にとっての代表的な受験用単語集であったかもしれない。しかし「単語集＝受験英語」という等式は比較的新しい結びつきであり、単語集の歴史はわが国における入学試験発生以前、すなわち江戸時代にまで遡ることが可能である（熊谷、2019）。

江戸時代を嚆矢とし、その調査対象を明治、大正、昭和、そして現代にまで広げ、わが国における単語集の歴史の変遷を調査・研究している成果の一部は、熊谷（2019）に示されている。出来（1994）によれば、英語教育史研究の領域はいくつかに分類されるが、そのなかには英語教育に関する書誌学的（史的）研究が含まれる。単語集研究はそのなかの下位分類にあたる、英語参考書研究に位置づけることができよう。そのような研究にあたり、単語集の収集や分類が必要となるのは自明の理である。しかしその過程には、ある課題が残されている。それは従来の研究において、単語集が一体どのような教材をさすかについての議論が閑却されてきたという点である。特定の領域の発達史を研究・考察するには、この点を明らかにすることは肝要である。なぜならば、収集した資料群を単語集だと立証して論を進めるためには、「単語集とは何か」という問いに答えることが急務であるとの考えに至ったからである。

2. 研究目的

本小論では、英語教育史研究における「単語集」という用語が意味する範囲を明確にし、単語集が本来的に有すると考えられる機能およびその特徴を明らかとする。本小論は英語参考書研究、ことに単語集研究に取り掛かるうえでの根幹を担うところであり、当該分野の研究における方法論を提唱するものである。単語集の研究は英学史や英語教育史の分野のみならず、英語教育学、国語学など多様な立場から研究が行われている¹。しかし単語集の位置づけを詳細に論じた研究は管見ではあるが、いまだ類をみない。本小論を通して英語教育史研究における単語集の位置づけを再考し、教材の収集およびその分類を行う際に有用な指標を導き出し、提示できれば幸いである²。

3. 単語集の位置づけ

3.1 先行研究における「単語集」とは

本小節では初めに、英学史および英語教育史の分野における学術書を複数とりあげ、「単語集」という用語が従来どのようにとらえられているかを整理し、そこから明らかとなる問題点を指摘したい。以下に年代順で列記した先行資料4点を、その分析対象とする：

1. 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(1962)
2. 『マイクロフィルム版 初期日本英学資料集成』(1976)
3. 『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(1991)
4. 『神田佐野文庫所蔵 若林正治コレクション英学資料目録』(2018)

上記研究資料は、江戸時代から明治時代において編纂された英学書をおもに射程としている。特筆すべきは、とり挙げられている英学書が複数の項目に分類されているという点であり、このような形式をそなえた研究書はかねてより稀少である。ゆえに上記の資料群は特定の教材群における発達史を研究するにあたっての重要な位置を占めるものだと判断し、本小論の分析対象として採用した³。これら資料における用語の使い方を比較・整理することは、単語集の位置づけを考えるうえでの出発点ともいえよう。以下、端的ではあるが各先行資料の概要を示しておく。

1. 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(以降、『解題』)は荒木伊兵衛『日本英語學書志』(1935)で知られる氏旧蔵における英学資料の一括購入を濫觴とし編纂された、約300冊の英学書の解題を収録した労作である。2. 『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(以降、『資料選』)は『解題』の続編ともいべきもので、先行書では叶わなかった図版の収録を実現するとともに、英学のみならず、蘭学資料の解題をも豊富に含めた良作である。そして3. 『マイクロフィルム版 初期日本英学資料集成』(以降、『集成』)は底本を若林正治氏旧蔵書とし、295冊の英学書を35ミリポジティブロールフィルム、計34リールに収録したものである。『解題』には掲載されていない英学書も数多く収録されており、ことに貴重資料の閲覧が容易となった点が際立った特徴だといえる。『集成』の発刊後、それら底本を含む英学資料群は神田外語大学附属図書館に移管された。そして2018年にはそれらのうち695点の書誌事項を記載した、4. 『神田佐野文庫所蔵 若林正治コレクション英学資料目録』(以降、『英学目録』)が公開された。目録という役割を担いながらも、各英学書の簡便な解題が付されている場合もあり、英学書の研究において重宝すべき資料の一つといえる。最近に公開されたものであるため、従来の研究に対する補完的役割も担っているといえよう。

先に言及したとおり、上記4冊は江戸期から明治期に刊行された英学書を複数の項目に分類しているというのが共通点である。では各先行資料間における項目になんらかの対応関係を見出すことは可能であろうか。この問いを明らかとするため、以下に当該の先行資料群における英学書の分類を表にまとめ、提示する：

表1 主要先行資料における英学書の分類内訳

書名(略称)	『解題』	『集成』	『資料選』	『英学目録』
発刊年	1962	1976	1991	2018
分類名1	綴字書	辞書	綴字書・運筆書・ 横文字紹介書	綴字書・仮名・アルファベッ ト・ローマ字関係
分類名2	辞書	文法	単語集・会話書	会話書
分類名3	単語書	音韻・文字	辞書	文法書
分類名4	会話書	単語	文法書	歴史
分類名5	文法書	会話・書簡	読本	医学
分類名6	文範書	読本		俗文化
分類名7	教科書			読本
分類名8	翻訳書			理学
分類名9	雑書			単語集・語彙等

注：筆者作成。

上記表が示すとおり、各先行資料によって英学書の分類法はさまざまであるが、一方で多くの共通性も見出せる。各研究によって取り扱う英学書の数、種類が異なるため、分類法にいささかの相違が出ることは当然であろうが、表内下線部が示すように、区分のなかには「単語」と付くものが必ずみられる。これはどのような資料群をさすのであろうか。

第一に『解題』における「単語書」だが、この用語は概して英語教育学の分野ではみられないものである一方、英語教育史の分野では出来(1980)や茂住(1989)にて同様の文言がみられる。ただし「単語書」に分類された英学書の説明を見るかぎり、「単語集」と言い換えられている場合も多いため、『解題』における「単語書」のさすところは実質、「単語集」と同じだととらえて差し支えないと思われる。ただし、「単語書(集)」が一体どのような英学書をさすのかについては明記がない。

第二に『資料選』であるが、表が示すとおり「単語集」という区分が確認できる。『資料選』は『解題』の続編であるため、『解題』における「単語書」と『資料選』における「単語集」が同一の区分をさすことは、両者でとりあげられている英学書が類似していることも含め推測は容易である。しかし単語集がどのような教材であるかについての言及が見られない点は『解題』と同様で、英学書によっては『解題』と『資料選』において異なった区分でとり挙げられているものもあるため、いささか一貫性に欠ける場合も見受けられる。『資料選』では「単語集」が「会話書」と同じ区分にまとめられているが、これは江戸期および明治期における単語集が、会話書と統合された形で編纂される例が散見される(熊谷、2019)ためだと思われる。

第三に『集成』における「単語」という区分であるが、これには同梱の「収録書総目録」の序文にて説明がなされている。それによると「単語」とは辞書の初歩的形式をさすものだと述べられており、同書における「辞書」の区分とは差別化が図られているようであるが、初歩的形式の辞書とは一体どのようなもので、また通常の辞書とはいかにして区別が可能であるかについての旨は明らかではない。また序文には「この集成には、初歩の単語集、絵解き式のものから読本(リ

ーダー)としての歴史・地理・理科に関するものまで入れてある」とも述べられているが、「初歩の単語集」が本書の「単語」に区分される英学書群をさすのかも不明である。整理すれば序文における「辞書の初歩的形式」、「初歩の単語集」という二つの文言と、『集成』にて設けられる「単語」という区分が一体どのような関係性を有しているのかが判然としないというのが、本研究者の解するところである。また『解題』では「単語書」としてとりあげる英学書を、本書では「会話・書簡」に分類するなどの不可解な点もみられる。

第四は『英学目録』における「単語集・語彙等」という区分である。本書はまず英学書の配列を「刊行年順」と「刊行年不載資料」の二種に大別し、後者のみに対し表1にみられるような小分類を施している。この分類に関し、本書の凡例では「書名あるいは内容の類似したものをできるだけまとめて配列した」(p.2)との文言が確認される。しかし本小論に照らせば、どのような内容を含むものがとくに「単語集・語彙等」であるのか、より具体的な説明が欲しいところである。また分類における「単語集」と「語彙」が同一の教材群をさすか否かについても言及がない。本書を通読するかぎり「単語集」という文言は9箇所、「語彙」に関しては6箇所みられる一方で、「単語帳」や「語彙集」といった文言もそれぞれ5箇所、14箇所にみられた。しかしおのおのが根拠をもって使い分けられているといった様子はないため、各用語はすべてほぼ同じ意味合いをもって用いられていると推測される。

以上4種の先行資料を概観するうえで明らかとなった問題点は、第一に先行資料における用語の不定性である。ここでの不定性とは、同一資料内における用語のばらつきと、各資料でとり挙げられる用語を比較した場合に生じるばらつきの二通りを意味する。前者はたとえば『解題』における「単語書」と「単語集」や、『英学目録』における「単語集」や「語彙集」がそれにあたり、後者の場合は『解題』の「単語書」、『資料選』の「単語集」、『集成』の「単語」、『英学目録』の「単語帳」における関係性がそれに該当する。前者は資料内の文脈を考慮することで、それぞれの用語には明確な使い分けが存在するわけではなく、いわば同義語として機能している可能性を看取できる。つまり各編纂者の暗黙の了解において、同じ意味合いでもさまざまな言い換えが行われているのであろう。一方後者、すなわち4種の学術書における用語を比較した際であるが、「単語書」、「単語集」、「単語」、「単語帳」すべての名称に当てはまる英学書の一例として、『英仏単語便覧』上巻が挙げられる。このような例から、上に掲げた用語は類似した意味範囲を包含していると判断できよう。

すると一見して用語の不定性には問題がないようにも思われるが、このようなばらつきは名称の学術的な位置づけがまだ整備されていないことの証左ではなかろうか。命名については各資料の編纂者による個人的な判断に委ねられているのであろうが、そこに学術的な意義があるとは考えにくい。むしろ同じ概念を内包しているのであれば、後続の研究者を考慮し用語は統一されてしかるべきであるというのが本論の主張である。逆にいうと、もし意味合いに相違があるならば、その旨が明記されていなければ甚だ不都合であるといわざるをえない。

第二は先行資料における分類の不透明性である。それぞれの先行資料はなんらかの判断をもって英学書を複数に区分していることは明らかだが、それらがどのような根拠をもって設けられたのか、すなわち分類までの過程が瞭然としない。ことに「単語」にかかわる分類はその点が顕著で、英学書によって分類先が一致しないものが散見されるのも、どのような特徴や機能を有するものが当該の分類に配されているのかが曖昧なままとなっていることに起因しているといえる。つまり「単語」にかかわる英学書は、名称の不定性という外面的な問題だけでなく、どのような教材をさすのかという内面的な問題もまた同時に孕んでいるといえよう。

このような用語の位置づけに統一性がない状況でそれらを安易に援用することは、整合性を欠いた概念を後続の研究に転移することになりかねず、避けねばならない。無論、先行研究における所見に留意することは前提であるが、同時に用語の位置づけ、本小論の目的に沿わせれば「単語集とは何か」を考察するための根本的な枠組みも、また必要であるといえよう。

3.2 「単語集」という用語の発現

「単語集」という用語がいつ、どのように用いられ始めたかについて、正確に知ることは難しい。明治初期にはすでに、『英語実用便』(1878)という英学書の表紙に「英語実用便 単語集 全」という文字を見ることができる⁴。だがこの用語は明治中期、および後期を迎えるとより盛んに用いられる傾向がみられる。たとえば1886年、岡本信(抄訳)『万民必携英学自在』という英学書が編纂されているが、そのなかには「新撰単語集」というセクションが設けられ、英語の見出し語とそれに対する訳語、カナ発音が添えられている。時には見出し語をあらわす図絵も付されているのが特徴である。1899年の『日本英学新誌』第8年1号にも「和英単語集」(pp.19-20)というセクションがみられる。日本民法上の用語に焦点が当てられ、*guardian*「後見人」や*public prosecutor*「検事」などの英単語が収載されるものである。同年には井上十吉(編)『英和会話作文彙材』が発刊され、そのなかにも「単語集」という小見出しで政治や軍事、教育に関する用語が英和対訳の形式で収録されている。また1901年には英語雑誌『英語青年』の前身、『青年』第6年8号において「単語集(銃獵)」(pp.8-9)というセクションが設けられ、*Barrel*「銃身」や*Shot guns*「散弾銃」などの見出し語が紹介されている。さらには1902年、フランシス・マカラと勝俣銓吉郎により『ABC會話』が刊行されたが、本書にも「中學単語集」が付録として添えられ、和英対訳の形式で見出し語がおさめられている。そして1908年には松本茂雄の『英和実用単語集』が発刊され、再び書名に「単語集」という文言を採用する様子が確認される。このように「単語集」という用語は明治時代を下るにつれて、英語雑誌や教材に比較的頻繁に見出すことができるのである。

また「単語集」という用語は当時の出版物ばかりに用いられていたわけではない。1909年、愛媛県師範学校には、まつだよそのすけ 柰田與惣之助という英語教育者がおり、手書きの謄写刷プリント『英語教授法綱要』を自身の学生たちに配布していた。そのなかには以下のような文言を確認できる：

…教授中には自国語を用ゐるを妨げず、話は多く教師之を行ひ、生徒は不斷に之を繰返し又教師の間に答ふ、而して一課を終れば口に作文の教授を行ひ、文法教授の如きも早くより之を行ふ、然れども爾余の練習を結合せんことを力む、連続的文章に至ては之を単語集の終れる後に行ふ⁵。(下線部筆者)

以上の引用は、柰田が当時著名であった英語教授法の一つ、グアン法⁶を実際の教育現場に反映させた場合の教授例を述べている部分である。ここでの「単語集」が意味するものは定かではないが、「英語の語彙に関連する何か」であると同時に、それは連続的文章、すなわちまとまりのある英文を学ぶ前に必要とされるものだということがわかる。以上の例から「単語集」という用語は、明治期における市販教材や雑誌のみでなく、教育現場でも用いられていた可能性を見出すことができる。

字義どおりに解釈するのであれば、単語集とはいわば「単語を集めたもの」だととらえることができる。ただしそのような解釈をした場合、辞書などもそのなかに含まれるのではないかとい

う疑問が生じる。事実、櫻井(2000, p.2)が『辞書』と『単語集』の区別について必ずしも学界の共通理解が存在しているわけではない」と指摘しているが、これは事実であろう。たとえば早川(2006)は、江戸期から明治期にかけて編纂された英語辞書の書誌事項を編年体形式で記述しているが、他の研究では単語集に区分されるものも辞書として紹介している。なぜこのようなことが生じるかといえば、櫻井(2000)の以下のような指摘が有力である：

「辞書史」として論じる場合の「辞書」は「辞書的なもの」という意味で使われ、その中には「字書」も「事典」も含まれることになる。「単語集」も同様に、広義の「辞書」(すなわち「辞書的なもの」)にはその内部に含まれるが、狭義の「辞書」とは区別される。(p.2)

このような言及を勘案するに、早川(2006)の研究では辞書を広義でとらえており、単語集もまた「辞書的なもの」として取り込まれているということになる。では一方で「狭義の単語集」とは何か。前に挙げた先行解題資料の多くは、辞書と単語集を明確に区分している。つまりこれら資料において単語集は「広義の単語集」ではなく、「狭義の単語集」としてとらえられているのであろうが、その様相は明らかではない。したがって狭義の単語集とは何かについて、今一度とらえ直す必要がありそうである。ゆえに次節ではまず単語集と辞書の特徴を比較し、両者における相違点を詳らかにしたい。

3.3 辞書と単語集

辞書は語彙の「検索」、単語集は語彙の「記憶」に重点が置かれているという意味において、両者は峻別される必要がある。まずは辞書の定義について見てみよう。林(1968)が紹介する *Le Dictionnaire de l' Académie Française* (1694, p.332) では、辞書を“Vocabulaire, recueil par ordre de tous les mots d'une langue” [ある言語のすべての語を順序よく収集したもの、全語彙⁷⁾] と定義している。さらに同書において *vocabulaire* の頁 (p.656) に目を向けると、「辞書」との言い換えのあとに“*Livre qui enseigne les mots d'une langue, & leur signification*” [ある言語の語句とそれらの意味を教える書⁸⁾] と記されている。これらを見ると、辞書とは「ある言語の語義における説明を行うために語彙が収集され、配列されたもの」だと理解できる。林(1968)も述べており、これは辞書がもつ本来的な性質や機能が、どのようなものなのかをおおよそは示しているといえる。しかし定義としてはいささか抽象的で、辞書の具体的な様相は見えてこない。つまり「広義の辞書」の説明としては充分であるといえるが、辞書と単語集を区別するためには「狭義の辞書」とは何かについての検討もまた必要である。

したがってつぎに、*The Oxford English dictionary* (OED) において辞書とはどのように定義されているかにも注目してみる。それによれば：

“A book which explains or translates, usually in alphabetical order, the words of language or languages (or of a particular category of vocabulary), giving for each word its typical spelling, an explanation of its meaning or meanings, and often other information, such as pronunciation, etymology, synonyms, equivalents in other languages, and illustrative examples.”

[一つまたは複数の言語(または特定の語彙)の単語を通常アルファベット順に説明・翻訳した本。各単語におけるその典型的な綴り、意味が説明され、しばしば発音、語源、同義

語や他言語の同等語、あるいは図解例も情報として含まれる。]

(Oxford English Dictionary Online, as of 2019, 筆者訳・下線部筆者)

とある。上記下線部を参照すれば明らかだが、辞書は通常アルファベット順で見出し語が配列されており、語源や同義語なども情報として含まれているようである。配列がアルファベット順であるという特徴は、Samuel Johnsonの*A Dictionary of The English Language* (1755)においても“A book containing the words of any language in alphabetical order, with explanations of their meaning” [すべての言語の単語をアルファベット順に含み、その意味を説明した本] (筆者訳・下線部筆者) のように述べられているため、古くからの様式として存在していることは明らかである。

一方で、単語集とはどのようなものをさすのであろうか。この点に関しては門田・池村 (2006) が詳しい。それによれば単語集とは見出し語の扱い方、配列、掲載情報、音声教材の有無、推薦する学習法の有無という5つの構成要素によって大別が可能だという。さらに見出し語の扱いは「単独での提示」と「連語 (コロケーション) での提示」の2種、配列は「アルファベット順」、「レベル順」、「頻度順」、「トピック順」の4種に細分化される。そして掲載情報も「例文」、「関連語」、「語源情報」の有無で区分されるとしている。これが現代における単語集のおおよその書誌の特徴であるようだ。ここで明らかなのは、現代の辞書と単語集はその体裁が非常に類似しているという点である。たとえば見出し語の配列がアルファベット順で掲載されるのは辞書のみに限った傾向ではなく、単語集にもみられることがわかる。掲載されている情報も辞書と単語集では共通点が多く、両者を書誌的な情報のみで差別化することはいささか困難であると言わざるをえない。加えて、上記に挙げた例はおもに現代の辞書や単語集に関する特徴を述べているにすぎず、江戸時代や明治時代において編纂されたそれらを峻別する際には、適当な指標とはなり得ないこともまた事実である。では辞書と単語集、古今を一貫して両者がもつ、本質的な懸隔とは何か。その点を明らかとするには櫻井 (2000) も指摘するように、おのおのの利用目的に目を向ける必要があるだろう。

辞書の利用目的に関して、古くは勝俣 (1939) が、辞書とは「単語を引いてその語義を調べる」(p.v) ものだとしており、岩崎 (1968) も「辞書というものはわからない言葉を引いて解決してもらおうもの」(p.12) だと述べている。さらに時を遡れば、福沢諭吉の『福翁自伝』で「ゾーフ部屋という字引のある部屋に、五人も十人も群ぐんをなして無言で字引を引きつつ勉強している。」(pp.83-84) とあるように、辞書は古来より語彙を検索するために存在していた。近年でも赤須 (2016) が「辞書と言えば、『引く』ものである」(p.3) と話すように、辞書のおもたる目的は、過去から現在において一貫性を保っているようである。

一方単語集の利用目的は何かといえば、赤尾 (1934) が「引くための dictionary ではなく、覚えて活用するため」(p.10) だと述べている。また古くには、江戸時代に刊行された『三語便覧』という単語集の凡例において、以下のような記述がみられる：

學者闇記英語、則讀米籍亦不甚難、是無也、米固學英語故也、學者欲讀米籍、則諳記干英語、斯爲捷徑。[學者英語ヲ闇記セバ、則チ米籍モ亦タ甚ダシクハ難カラズ。是レ他無シ、米固ヨリ英語ヲ學ブ故ナリ。學者米籍ヲ讀マント欲セバ、則チ英語ヲ諳記セヨ。斯チ捷徑タリ。(訓み下し・櫻井、2009, p.33)。

上記からもわかるとおり、江戸時代の単語集『三語便覧』がすすめる利用法とは「闇記（語記）」である。これは、われわれの知る単語集と同じ利用目的を想定した教材が、江戸時代よりすでに存在したことを意味している。そしてこのような考え方は現代においても一貫性を保っているようで、投野（2015）も単語集とは『「覚えるためのツール」で辞書とは違います』（p.75）と主張している。櫻井（2000）も指摘するように、もちろん単語集は検索にも利用可能であろうが、それは第二の利用法であって基本的な利用法ではないのである。したがって、辞書とは語彙を「引く」ものであり、単語集は語彙を「覚える」ものであるとして区別しなければならないのである。

3.4 語彙リストと単語集

前節では、単語集とは「語彙を覚えること」がおもな利用目的であるという点で辞書と差別化を行った。つぎに注目すべきは、語彙リストと単語集の関係性である。語彙リストのおもな特徴も、アルファベット順あるいは使用頻度で語彙が配列されている場合が多い（中條、1991）といわれているが、それは単語集の構成要素とも一致するものである。ゆえに単語集を広義でとらえれば辞書だけではなく、語彙リストもその射程に入るわけであるが、それは「狭義の単語集」にはそぐわない。両者を厳密に区別する場合、語彙リストとは本来、覚えるべき語彙とその量についての指針を提供することがおもな目的である一方で、単語集とは語彙リストの知見を応用した、発展的な語彙学習教材だととらえねばならない。辞書とは異なって、従来語彙リストと呼ばれるものは単語集と比べて歴史が浅く、多大な影響力を有し始めたのは大正時代以降である。ゆえに語彙リストと単語集の峻別は江戸期、および明治期には直接関連のないものといえよう。しかし単語集の歴史を長期的な視点で研究する場合において、語彙リストの存在を看過することはできない。なぜなら語彙リストと単語集は、大正期においてその合流を見ることができるからである。したがって本小節では、語彙リストにおける従来の特徴を概観し、狭義の単語集との差別化についての詳細を述べることにする。

優れた語彙リストが盛んに編纂され始めたのは20世紀初期、一般にvocabulary control movementと呼ばれている時期からであった。その折に出版されたなかで有名なものといえば、Edward L. Thorndike が1921年に著した *The Teacher's Word Book* である。この語彙リストは、当時出版されていた幾多という文書や教材をもとに語彙の出現頻度を割り出し、もっとも頻度の高い10,000語を選定し、それらをアルファベット順に掲載している。さらにThorndikeは *The Teacher's Word Book* の増補改訂版を1931年に著し、そのあと1944年にIrving Lorgeとともに *The Teacher's Word Book of 30,000 Words* を発表した。1944年の編纂では、その当時としては驚くほど莫大な語彙データがもととされていた。したがって当初は多くの研究者にとって非常に画期的な語彙リストだと考えられていた。

同時期に発表された語彙リストで有名なものには、Charles K. OgdenによるBasic English Word Listがある。このリストは *Basic English: A general introduction with rules and grammar* (1930) に掲載されているものである。語彙の提示方法はThorndikeのリストと同じくアルファベット順であったが、語彙の選定方法が従来とは異なっていた。Thorndikeは頻度で語彙の選定を行ったが、Ogdenは語彙の有用性を基準に、基本語彙850語を選定した。これら語彙はより多くの場面で使用できる語を優先しており、*chair*、*bench*、*stool*などは用いずに*seat*のみを提示しているのが例である（堀口ほか、1991）。

そしてThorndikeやOgdenの語彙リストよりも増して、多大な影響力を発揮した語彙リストといえば、Michael Westの *A General Service List of English Words* (GSL) であろう。GSL

は1930年代における語彙選定の研究を端緒とし、1953年に出版された。本書は米国にてThorndikeとLorgeにより開発された語彙リストを参考としていた(Carter, 2012)。近年ではCoxheadがAcademic word list (2000)を発表し、2013年にはBrowne, Culligan and PhillipsによってNew General Service List (NGSL) が発表されるなど、語彙リストの開発は現在まで精力的に行われている。

ここまで簡潔に語彙リストの系譜を概観したわけだが、上記リストには共通点が存在する。その一つは杉森(2017)も指摘するとおり、従来語彙リストとは単語の「リスト」にすぎず、語の意味や用例等は通常省かれている場合が多いという点である。たとえば*The Teacher's Word Book of 30,000 Words* (1944)は選定された語彙がアルファベット順に羅列されているだけで、それぞれの語彙に対応した語義が示されていなかったため、該当の語彙が多義である場合、抽出された高頻度語彙に対し、どの語義を当てはめればよいか区別できないとの問題点が指摘された(Matsuoka, 2012)⁹。これはThorndikeが先に発表した*The Teacher's Word Book* (1921)にも同様のことがいえる。またOgdenのBasic English Word Listにも語義が掲載されておらず、850の語彙を学ぶことは850の意味を学ぶことと同義ではないとの指摘がされている(Carter & McCarthy, 1988)。このように両者の語彙リストは、おのおのの語彙に対応する語義を載せていないがゆえの問題点が指摘されているといえるが、語彙リストのおもな目的は従来以下のように述べられている：

- a. A list of the basic and most important words in a language or in a REGISTER of a language, generally intended for use as a basis for language teaching or for the preparation of teaching materials. [ある特定の言語また言語使用域において、基本的かつもっとも重要な語彙リストをさす。一般には語学教育、または教材の作成における基盤として使用することを目的とする。] (Richards & Schmitt, 2010, p.638);
- b. Word lists are important in language teaching for a variety of purposes. [語彙リストはさまざまな目的のための言語教育において重要である。] (Nation & Webb, 2011, p.131);
- c. The value of word lists derives from the fact that they reveal the words which are most useful to learn. [語彙リストの価値は、学ぶべきもっとも有用な単語を明らかにするという事実から由来している。] (Webb & Nation, 2017, p.195) (以上、筆者訳・下線部筆者)

以上の引用を勘案するに、語彙リストの役割とはおもにどのような語彙を教えるべきか、あるいは覚えるべきかにあたっての指針を提供するものだとして理解できる。反していえば、提示された目標語彙どのように記憶するかという観点が、語彙リストそれ自体の扱う範疇には含まれないのである。ゆえに語彙リストが、しばしば語義や用例を省いた単なる「リスト」として提示される場合があることにも首肯できよう。つまり語彙リストとは「学習用」ではなく、「教授用」資料としての向きが強いといえるのである。換言すれば、訳語のない語彙リストはそれのみで効力を発揮できるわけではなく、それを活用する存在、たとえば教師などがいて初めて、語彙の学習が成立する場合が多いといえよう。

一方で単語集を利用した学習は、見出し語とその語義をペアで記憶することにより行われるのが通例である(門田・池村, 2006; Nation, 1982)。つまり単語集には語義があらかじめ附載

されていることが前提となろう。したがって単語集はそれ自体で語彙学習が成立する、いわば独習が可能であるといった点でも、語彙リストとは異なったものであると考えなければならない。しかし語彙リストのなかには、GSLのように語義に値するものが記載されているものや、NGSLのように開発者のインターネットサイトにおいて、各抽出語彙の語義を参照できるものもある¹⁰。これらはどのようにとらえるべきであろうか。GSLやNGSLの場合、単語集と同様の学習法が可能であるわけだが、それは第二の使用法であると考えほうが正確である。たとえばHarlech-Jones (1983, p.63) が “it [GSL] was especially prepared for ESL [English as a second language] teaching” [GSLはとくに第二言語としての英語を教授するために用意されたものである] (筆者訳) と説明するように、GSLの本来的目的も先の語彙リストと同様に、学習者にどのような語彙を教授するかにおける指標を提供することにあるといえる。GSLはどの語彙を教えるかだけでなく、同じ語彙内においてどの語義が頻繁に用いられているかについても示されていることから、教える側にとって有用な指針となりえることに疑いはない。

NGSLにおいても抽出語彙の語義を開発者のウェブサイトでも参照できるものの、その目的はNGSL Builderと呼ばれる無料のiPhone Flashcardアプリのために開発されたことが報告されており¹¹、NGSLに初めから付属しているものではないことが理解できる。このことから、NGSLそれ自体にも語彙を記憶させる意図は含まれていないとみるのが妥当である。じっさい、Browne (2014) にて掲げられたNGSLの開発目的を参照しても、単語集のような目的、あるいは利用法は述べられていない。したがって語義を参照できるGSLやNGSLも、単語集とはまた異なった位置づけとすべきものであろう。

他方でわが国においては古くから、語彙リストを単語集の編纂に活用する動きがみられた。Thorndikeが発表した語彙リストのうち、1931年版に収載された2万語のなかから前半の1万語を抽出し、それらに語義を書き加えたのが竹原常太編『ソーンダイク基本英語単語』(1934)である。また2005年には『「大学英語教育学会基本語リスト」に基づくJACET8000英単語』が編纂されたが、これも2003年に大学英語教育学会が開発した語彙リストに語義や用例、派生語を新たに加えたものである。さらに2016年には、GSLにCorpus of Contemporary American English (COCA) の発表している頻出5000語を加味した、日向清人著『クイズでマスターするGSL基本英単語2000』が刊行された。これらはまさに語彙リストが単語集へと昇華した好例だといえよう。

ここまでをまとめれば、国外で盛んとなった vocabulary control movement を濫觴^{らんしょう}とし、語彙リストがわが国へ流入したことを機に、それらは単語集との結びつきを強めたといえるが、前者は特定の目的に合わせ、どのような語彙をどれだけ学ぶべきかを示すことがおもな目的である一方、後者は語彙を記憶することに重点がおけるように語義を記載した、発展的な独習用教材だととらえることで、両者の区別が可能となるのである。

3.5 単語帳と単語集

ここまでにおいて、単語集の条件とは「語彙を記憶するツール」であるとともに、それを可能にすべく「語義が記載されている」ものでなければならないことを明らかにした。

そこでつぎに注目したい点は、単語帳と単語集の関係性である。両者はかねてより同じ意味合いで用いられる節があるが、本来同一視されるべきものではない。なぜなら単語帳とは、各学習者が私用で作成する語彙学習教材である一方、単語集は版元を有する編纂物であり、それは個人ではなく大衆に向けて作成されているという点において区別が必要であるとの結論に至ったから

である。つまり両者は本来、資料として異なる扱いを受けるべきものなのである。

それではまず、従来の研究において両者がどのようにとらえられているかを俯瞰することにした。第一に言語教育の分野に目を向けると、投野 (2015) や安部・中野・張 (2018)、中田 (2019) では単語集と単語帳という用語が併用されていることが理解できる。しかし両語を使い分けている明確な意図は読み取れないため、半ば同義語として扱われている可能性が高い。第二に英語教育史の分野においても、松田編 (2018) にて同様の傾向がみられるのは先のとおりである。また南出 (1991) はわが国における初めての英和辞書『語厄利亜語林大成』の体裁について「現在の観点からするとむしろ単語帳に近いと言えるだろう」(p.126) と述べるが、この「単語帳」とはどのような教材をさすのであろうか。他の先行研究を概観すると、当該の英和辞書に対して「こんにちからみれば、受験単語集にも足らぬ簡単なもの」(井田、1976, p.43)、「今でいえば受験用の単語集くらいのものに過ぎなかった」(伊村、2003, p.14) というように、非常に類似した文言がみられる。ゆえに南出 (1991) の述べる「単語帳」と、井田 (1976) や伊村 (2003) が述べる「単語集」は同一の意味合いであるとみてよい。これは上記に挙げた『語厄利亜語林大成』だけではなく、江戸時代に編纂された英単語・会話集『ゑんぎりしことば』でも同様の事例がみられる。『ゑんぎりしことば』の前半部を単語集と呼ぶのは惣郷 (1990) で、単語帳と呼ぶのが三好 (2018) である。

第三に現在出版されている英語教材に注目してみると、これらのうちでも単語集と単語帳を同義語のように扱う例は往々にしてみられる。たとえば加藤ほか (2018) 『TOEIC L & R テスト基本単語帳』に付属する帯広告には、「L & R テスト完全対応単語集」との記載があり、単語帳と単語集ということばが併用されているのがわかる。また荻野治雄監修『データベース 4500 完成英単語・熟語』(第5版、2017) のはしがきでは、「単語帳は単語のもつ本質的な意味を効率よく、リズム感をもって身につけられることが必須条件です」(p.2) と述べているが、本書の上級編にあたる小森・拝田・出雲編著『新版完全制服 データベース 5500 合格英単語・熟語』(2003) のはしがきにおいては「入試で合否の分かれ目を決めた単語だけを集めて、効率よく学ぶことができる単語集を作ることになりました」と記されており、それら用語の使い方に統一性はない。以上の事例を見れば、これまでにさまざまな領域において、単語帳と単語集は同一であるとの見方がなされてきたことは明白であろう。

ではここで、文久三年 (1863) ごろに栗本市郎左衛門によって編まれた『文久三年御蔵島英語単語帳』をとり挙げたい。このもの自体には正確な名称がなく、上記のものは小林 (1998) による呼称であるが、高橋 (1976) や佐渡谷 (1992)、坪井 (2014) も同様に「単語帳」と称するものである。この単語帳は米船ヴァイキング号が御蔵島に漂難した際、その対応にかかわった村役人、栗本市郎左衛門がアメリカ人とのコミュニケーションを通して作成したものである。収録語数は約 400 語で、英単語の横に訳語が付されており、発音がカタカナで示されている。もし従来のように単語帳を単語集の同義にとらえるならば、当然『文久三年御蔵島英語単語帳』も単語集研究の収集対象に含むのが道理であろう。しかし英語教育史の分野においての場合、そのような判断は早計である。なぜなら先述のとおり、単語帳と単語集はその性質からして、元来混同されるべき用語ではないからである。

単語帳の本来の意味については、『日本国語大辞典 第13巻』(1975) によって明確となる。それによれば、単語帳とは「外国語の単語と、その訳語を記すための、または記した小型の帳面」(p.258) だという。左記の定義をより明確にすべく、単語帳に言及している他の先行資料を以下にいくつか列記したい：

- a. 未知の単語を単語帳に書いて、辞書を引いてその譯語を記入することは凡そ英語を學ぶ者にとって最も肝要なことである (田中、1938, p. 45);
- b. 単語を単語帳に書き留めておくと、復習のときに非常に便利です (池永、1951, p. 11);
- c. 昔の高校生のほとんどは、教科書の予習には、相当な時間をかけて発音記号、品詞名、用例などを辞書から書き写しながら『単語帳』をつくったものだ (樋口・並松、2002, p. 58) (以上、下線部筆者)

上の引用に共通していえることは、単語帳とは本来自身が必要だと思う語彙を書き留めておくものであり、それはすなわち各学習者が自身で制作する語彙学習教材をさすということである。

一方で単語集とは多くの先行研究において、既製の語彙学習教材をさして言及している (たとえば、江利川、2011b; 伊村、2003; 石川、1998; 門田・池村、2006)。つまり単語帳と単語集は、「語彙を記憶する」ための教材であるという点では一致する。それゆえ、現代では両者が混同して用いられていることも理解できる。しかし単語集は出版を通じて多くの英語学習者の手に渡る教材であるからして、それらは学習者個人により制作された単語帳とは異なる性質を有していることは確かなのである¹²。

そのような点をふまえ、先の『文久三年御蔵島英語単語帳』に話を戻そう。小林 (1998) によれば、向学心が旺盛であった市郎左衛門は「英語に強い関心を寄せ、むさぼるように英単語を覚え、記録し、英語の知識をふやそうとしていた」(p. 61-62) と解釈している。当然、このような彼の英学に対する熱意の結果として、上記の単語帳が生まれたのであろうが、これは市郎左衛門が他の学習者を想定して編纂を試みたことを意味するわけではない。何よりも自身が英単語を学習するために記録をし、個人的にまとめたものなのである。したがって市郎左衛門が編纂したものは単語集ではなく、まさに単語帳と呼ばれるにふさわしいものである。じっさいに、佐渡谷 (1992) が「村の小学校やその他の場で教材として使用されたという話はきかれない。英語教育史上からみれば、これはもちろん現在の英語教育・学習との関連性はほとんど無いに等しい」(p. 120) と述べていることから、単語集の条件を満たしていなかったことは明らかである。歴史上において市郎左衛門の書き残した単語帳に類するものはほかにもある。1856年に米国初代駐日総領事タウンゼント・ハリスが下田に居をかまえた際、住み込みで彼の身の回りの世話をした人のなかで、西山助蔵という人物がいる。彼は米国公使館勤務中に一冊の英単語帳を書き残している。河元 (2000) は、本書を自力で編みあげた一庶民の西山を高く評価しているものの、「後世の学者に広く利用され、強く影響をあたえたことがおおいことが、その著者、著作の『価値』を高めるとするならば、残念ながら、助蔵の『単語帳』の利用度は無に等しい」(p. 51) とも述べている。このように本書も先に挙げた栗本市郎左衛門の単語帳と同様で、自身のために未知の語彙を収集した「単語帳」としての史料価値はいうまでもないが、単語集だと判断することは避けなければならないのである。

以上をまとめれば、本来単語帳とは自分自身の英語語彙学習を行うために作成する、きわめて個人的な教材であるのに対して、単語集は既製の語彙学習教材、すなわち他の学習者をも射程に含めて編纂された物であるという点で区別が可能となるのである。これはことに英語教育史の立場から教材を収集する場合、必須となる要件といえよう¹³。つまり単語集の研究において「単語帳」を収集対象から外すことは、当該研究における精緻化にもつながらないであろうか¹⁴。

4. まとめ ——単語集とは——

本小論ではまず、従来における「単語集」という用語の使われ方を概観し、比較を行った。その結果「単語集」には複数の呼称があり、それらは明確に使い分けられているわけではないことがわかった。そして「単語」にかかわる用語の意味する範囲にも研究によってばらつきが見られた。先達の指摘に倣えば、それは研究によって単語集を「広義」でとらえる場合と「狭義」でとらえる場合に大別されるからだという。しかし各先行資料がそのどちらかをふまえて教材を分類しているのかは明らかではない。またそのどちらかを念頭においていたとしても、それは一体どのような教材であるのかについては明確な規定がないままであることが改めて確認された。

そこで本小論では単語集の位置づけ、ことには「狭義の単語集」とは何かを明らかにするため、単語集との混同が予想される教材、すなわち辞書・語彙リスト・単語帳との比較を通し、単語集の有する条件を考察した。それらをまとめると、単語集とは以下3点の特徴を有するものだと結論づけることができる：

1. 語彙を検索するものではなく、語彙を記憶することを目的とした教材
2. 見出し語に対応した語義が付随しており、独習を可能とする教材
3. 学習者自身が作成し個人的に使用するものではなく、他の学習者を想定して編纂されている教材

これらは、江戸時代から現代にかけて編纂された単語集に共通してみられる特徴であると本研究者は考えている。各編纂物を単語集だと判断するためには、書名・体裁・編纂趣旨・時代背景などさまざまな観点からの検討が必要である。上記3点は、そのような検討をより円滑に進めるための重要な条件であるといえよう。そして先行資料に本小論で掲げた条件を対照させることで、従来とはまた異なる考察が産まれることが期待される。ただし、ここに掲げた条件のみでは単語集だと断定することが困難な英学書も存在する。たとえば江戸時代から明治時代にかけて刊行されたもののうちには、序文を欠いたものが数多くある。すると、当該の編纂物が何を意図したものが判然としない場合が多い。このような英学書に対しては、より慎重な検討が必要であることはいうまでもない。また屋名池(1991)のとり挙げる「横文字紹介書」とは、単語集ではなく綴字書の一種に分類される。英語の入門書といった性格は希薄で、おもな機能は外国文字の紹介であるという。しかし体裁から見れば、単語集と酷似するものもいくつかみられる。よって「横文字紹介書」と「単語集」の関係性についても、今後より詳細な考察が必要となるだろう。

そして後続の研究においては、用語の統一が望まれる。かねてより単語集に類する用語が遍在する旨は先にも述べたが、上記3点の条件と合致する教材に関するものは、「単語集」に統一することを推奨したい。あるいは単語集ではなく、同義として別の用語を採用するにしても、各研究においてそれはどのような教材であるかを明記することは必要である。特定の分野の発達史をとり挙げる者にとって、他の研究者に誤りなく、かつ円滑に援用を求めるには当然の責務であると、本研究者は考えるからである。

註

- 1 英語教育学の分野では石川 (1988) や熊谷 (2018)、国語学の分野では櫻井 (2005; 2009) が挙げられる。
- 2 単語集の位置づけは拙論 (2019) によってすでにとり挙げた。しかし考察を重ねた結果、より慎重なる議論を要するとみて、新たに本小論を記すに至った。したがって拙論においては、本小論の結果がふまえられていない点もあることをご容赦願いたい。
- 3 1.~3.の研究がわが国における英学史・英語教育史分野を活性化へと導く一端を担ったことは江利川 (2010) も述べるところであり、本小論で分析対象に含めた根拠でもある。4.の目録に関しては公開からいまだ日が浅く、先達の研究にてとり挙げられている様子はない。しかし他3点の研究書に類似した特徴を備えており、当該の分野に資するところが大きいものであると判断したため、分析対象に含めた。
- 4 松田 (編) (2018,p.75)
- 5 江利川 (2011a, p.43)。□は判読が困難な字句として江利川氏が付したものである。
- 6 従来の文法・訳読を中心とした教授法に対する反動として、フランス人のグアンによって新たに提唱された教授法。心理的教授法 (Psychological Method) と呼ばれ、幼児の言語習得過程を指導理念へ応用した点に特色がある (小川ほか、1982)。
- 7 訳は林 (1968, p.2) から引用。
- 8 同上。
- 9 Matsuoka (2012) によれば、たとえば語彙リストで提示されている *might* は、*power* の意味とも *may* の意味とも取れ、どちらが高頻度であるかが不明確である、というものである。
- 10 <http://www.newgeneralservicelist.org/new-ngsl-japanese-defs> 参照のこと。
- 11 同上。
- 12 岸田 (1953) も言及するように、単語帳にも既製品は存在する。しかし単語集は見出し語があらかじめ印字されおり、その配列は固定されているのがつねであるのに対し、単語帳はおのおのの学習者が書き込んだ順で語彙の配列が決まる。したがって単語帳の場合それが既製であるかにかかわらず、単語集とは異なった性質を有していることに変わりはない。
- 13 当然ながら、従来の研究すべてが両語を混同して用いているわけではないことに注意されたい。しかしなかには適切な使い分けが行われていない事例も散見されるため、本文で述べたような差異はつねに念頭におくべきことであろう。
- 14 ただし、「単語帳」という教材も各時代における英語語彙学習の痕跡を歴史的に辿るうえで、単語集とはまた異なる史料価値を有していることはいままでもない。個別的な学習教材であるため、単語集ほどの残存数を期待することは難しく、またその収集も困難であると思われるが、上記でとり挙げた以外にもそのような教材は確かに存在している。ゆえに単語集研究からは独立した形をもって研究・調査が行われることが望まれる。その際には本小論で導き出した「単語帳」の要件が、一部有用に機能しうるというのが本研究者の思惟するところである。

引用文献

- 相澤一美・石川慎一郎・村田年・磯達夫・上村俊彦・小川貴宏・…望月正道 (編) (2005). 『大学英語教育学会基本語リスト』に基づく JACETS000 英単語』桐原書店。
- 赤尾好夫 (1934). 『受験英語単語の総合的研究』歐文社。
- 赤須薫 (2016). 「紙の辞書を考える」南出康世・赤須薫・井上永幸・投野由紀夫・山田茂 (編) 『英語辞書をつくる——編集・調査・研究の現場から』 (pp.3-20). 大修館書店。
- 安部規子・中野明・張世霞 (2018). 「中国の高校生用英単語集に関する研究——日本の英単語集との比較を中心に——」『日本語教育 ICT 学会研究紀要』5, 83-92.
- 荒木伊兵衛 (1935). 『日本英語學書志』創元社。
- 池永勝雅 (1951). 『英単語の覚え方：基本英語 2000 語集』開文社。
- 石川慎一郎 (1998). 「英語コミュニケーション語彙——大学入試用英単語集の有効性の検証」『言語文化学会論集』11, 3-19.
- 井田好治 (1976). 「日本最初の英学書」日本英学史学会 (編) 『英語事始』 (pp.41-45). 日本ブリタニカ。
- 井上十吉 (編) (1899). 『英和会話作文集材』成美堂。
- 伊村元道 (2003). 『日本の英語教育 200 年』大修館書店。

- 岩崎民平 (1968). 「辞書に親しむ」『英語研究』5, 12-13.
- 江利川春雄 (2010). 「日本英語教育史研究の課題と展望」『日本教育史研究』29, 71-90.
- 江利川春雄 (2011a). 「明治期の小学校英語教授法研究 (2) 森田與惣之助『英語教授法綱要』の翻刻と考察」『和歌山大学教育学部紀要人文科学』61, 39-46.
- 江利川春雄 (2011b). 『受験英語と日本人——入試問題と参考書からみる英語学習史』研究社.
- 小川芳男・小島義郎・斎藤次郎・若林俊輔・安田一郎・横山一郎 (1982). 『英語教授法辞典 新版』三省堂.
- 荻野治雄 (監修) (2017). 『データベース 4500 完成英単語・熟語 [5th Edition]』桐原書店.
- 大阪女子大学付属図書館 (編) (1962). 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』大阪女子大学.
- 大阪女子大学付属図書館 (編) (1991). 『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』大阪女子大学.
- 大槻文彦 (編) (1890). 『言海 第3冊』大槻文彦.
- 岡本信 (抄訳) (1886). 『万民必携英学自在』金松堂.
- 尾崎富五郎 (編) (1878) 『英語実用便』錦誠堂蔵版.
- 勝俣銓吉郎 (編) (1939). 『研究社 新英和活用辞典』研究社.
- 桂川甫策 (1868). 『英仏単語便覧』理外無物楼蔵版.
- 加藤草平・タロック, R., ・中村信子・工藤郁子・石橋敦子・小野彰子・…研究社編集部 (2018). 『TOEIC RL & R テスト 基本単語帳』研究社.
- 門田修平・池村大一郎 (2006). 『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店.
- 河元由美子 (2000). 「西山助蔵の『英語単語帳』」『英学史研究』33, 41-55.
- 岸田敏夫 (1953). 『初学者のための英語学習法』高文社.
- 金田一京助・佐伯梅友・新村出・時枝誠記・西尾実・久松潜一・…山岸徳平 (編) (1975). 『日本国語大辞典 第13巻』小学館.
- 熊谷允岐 (2018). 「TEAP用英単語集と大学入試用英単語集の比較分析: 選定語彙と語義難易度に焦点を当てて」『異文化コミュニケーション論集』16, 33-44.
- 熊谷允岐 (2019). 「日本人と単語集: 日本における英語語彙学習教材史: 江戸編」『異文化コミュニケーション論集』17, 41-56.
- 小林亥一 (1998). 『文久三年御蔵島英語単語帳』小学館.
- 小森清久・坪田清・出雲富士子 (編著) (2003). 『新版完全制服 データベース 5500 合格英単語・熟語』桐原書店.
- 櫻井豪人 (2000). 『維新前後西洋語対訳単語集の基礎的研究』名古屋大学大学院博士論文 [未刊行].
- 櫻井豪人 (2005). 『類聚紅毛語訳・改正増補蛮語箋・英語箋I: 解説・対照表・索引編』港の人.
- 櫻井豪人 (2009). 『三語便覧: 初版本影印・索引・解説』港の人.
- 佐渡谷紀代子 (1992). 「栗本一郎と西洋黒船漂難一件記」『英学史研究』25, 107-127.
- 杉森直樹 (2017). 「学術語彙リストによる語彙指導を考える——新JACET8000 共通学術語彙リストの開発」『英語教育』2, 30-31.
- 惣郷正明 (1990). 『日本英学あけぼの』創拓社.
- 高橋基生 (1976). 「御蔵島に座礁した米船バイキング号」日本英学史学会 (編) 『英語事始』(pp.117-120). 日本ブリタニカ.
- 武信由太郎・勝俣銓吉郎 (編) (1901). 『青年』第6年8号. 英語青年社.
- 竹原常太 (編) (1934). 『ソーンダイク基本英語単語』大修館書店.
- 田中菊雄 (1938). 『英語学習法』研究社.
- 坪井健 (2014). 「ヴァイキング号事件と御蔵島の異文化交流: 黒船救難とある植物学者の活躍」『駒澤社会学研究』46, 69-83.
- 出来成訓 (1980). 『『英吉利単語篇』』大村喜吉・高梨健吉・出来成訓 (編) 『英語教育史資料 第5巻』(p.10). 東京法令出版.
- 出来成訓 (1994). 『日本英語教育史考』東京法令出版.
- 投野由紀夫 (2015). 『発信力をつける新しい英語語彙指導: プロセス可視化とチャンク学習』三省堂.
- 中條清美 (1991). 『英語教育基本語彙の選定に関する研究』千葉大学大学院博士論文 [未刊行]. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3053339> より取得
- 中田達也 (2019). 『英単語学習の科学』研究社.
- 早川勇 (2006). 『日本の英語辞書と編纂者』春風社.
- 林哲郎 (1968). 『英語辞書発達史』開文社.
- 樋口忠彦・並松善秋 (2002). 「語彙力の養成」『英語教育』6, 58-60.
- 日向清人 (2016). 『クイズでマスターする GSL基本英単語 2000』ティエス企画.

- 福澤諭吉 (1898). 『福翁自伝』富田正文 (校訂) (1978) 岩波文庫.
- マカラー, F., & 勝俣銓吉郎 (1902). 『ABC 會話』ABC 出版社.
- 堀口俊一・新井哲男・伊藤雄二・乾隆・加須屋弘司・金谷憲・…山内豊 (1991). 『現代英語教育の理論と実践』聖文社.
- 増田藤之助 (編) (1899). 『日本英学新誌』第 8 年 1 号, 日本英学新誌発行所.
- 松田清 (編) (2018). 『神田佐野文庫所蔵 若林正治コレクション英学資料目録』神田外語大学附属図書館.
- 松本茂雄 (1908). 『英和実用単語集』修学堂.
- 南出康世 (1991). 『辞書』大阪女子大学付属図書館 (編) 『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(pp.126-156). 大阪女子大学.
- 三好彰 (2018). 「清水卯三郎著『蚤んぎりしことば』に垣間見える海外とのビジネスの戸惑い」『日本英学史学会東日本支部紀要』17, 17-27.
- 村上義茂 (1854). 『三語便覧』達理堂蔵.
- 茂住實男 (1989). 『洋語教授法史研究——文法=訳読法の成立と展開を通して』学文社.
- 屋名池誠 (1991). 「綴字書・運筆書・横文字紹介書」大阪女子大学付属図書館 (編) 『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(pp.39-82). 大阪女子大学.
- 雄松堂フィルム出版 (編) (1976). 『マイクロフィルム版 初期日本英学資料集成』雄松堂フィルム出版.
- Académie française. (1694). *Le Dictionnaire de l'Académie Française, Dédié au Roy*. Paris: prés ST. Severin, au livre d'Or.
- Browne, C. (2014). A new general service list: The better mousetrap we've been looking for? *Vocabulary Learning and Instruction*, 3(1), 1-10.
- Carter, R. (2012). *Vocabulary: Applied Linguistic Perspectives* (2nd ed.). New York: Routledge.
- Carter, R., & McCarthy, M. (1988). Words lists and learning words: some foundations. In R. Carter, & M. McCarthy, *Vocabulary and language Teaching* (pp. 1-17). London & New York: Longman.
- Coxhead, A. (2000). A new academic word list. *TESOL Quarterly*, 34(2), 213-238.
- Harlech-Jones, B. (1983). ESL proficiency and a word frequency count. *ELT Journal*, 37(1), 62-70.
- Johnson, S. (1755). *A Dictionary of the English language*. London: W. Strahan.
- Matsuoka, W. (2012). Searching for the right words: Creating word lists to inform EFL learning. In D. Hirsh (ed.), *Current perspectives in second language vocabulary research* (pp. 151-177). Switzerland: Peter Lang.
- Nation, P. (1982). Beginning to learn foreign vocabulary: a review of the research. *RELC Journal*, 13, 14-36.
- Nation, P., & Webb, S. (2011). *Research and analyzing vocabulary*. Heinle: Cengage Learning.
- Ogden, C. (1930). *Basic English: A general introduction*. London: Kegan Paul, Trench and Trubner.
- Richards, J., & Schmitt, R. (2010). *Longman dictionary of language teaching & applied linguistics* (4th ed.). Pearson: Longman.
- Thorndike, E. (1921). *The Teacher's Word Book*. New York: Teachers' College, Columbia University.
- Thorndike, E., & Lorge, I. (1944). *The Teacher's Word Book of 30,000 Words*. New York: Columbia University.
- Webb, S., & Nation, P. (2017). *How vocabulary is learned*. Oxford: Oxford University Press.
- West, M. (1953). *A general service list of English words*. London, Green and Co: Longman.